

## カラードプラで乏血性の乳腺異常に対し乳腺造影超音波検査が有用であった症例

◎宮地 絵理<sup>1)</sup>、今吉 由美<sup>1)</sup>  
大垣市民病院<sup>1)</sup>

【はじめに】カラードプラで血流を指摘し得なかった乳腺異常に対して乳腺造影超音波検査(CEUS)を施行し、病変の診断に有用であった症例を経験したので報告する。

【症例1】60歳代女性。右乳頭から血性分泌物を認め精査目的に受診。超音波検査(US)で右乳房全体に軽度乳管拡張を指摘した。MRIでは右乳頭下に血性乳汁を伴った拡張乳管とその乳管周囲に濃染域を認め、悪性を否定できず second look US と CEUS を施行した。second look US では乳頭下4時方向にややヌケの悪い拡張乳管とその乳管から連続した3mmの低エコー腫瘤を認めた。カラードプラでは内部に血流シグナルの検出無し。造影を行うと拡張乳管と低エコー腫瘤はいずれも不均一に染影され、積算画像では周囲を含めた紡錘状に染影範囲を認め悪性を疑った。この病変に対し超音波ガイド下マンモトーム生検(US下MMT)を施行し、病理結果は非浸潤性乳管癌であった。

Bモードでは確信を持たずカラードプラでも血流を捉えられなかったが、CEUSで染まることによりMRIの指摘部位を同定でき、さらに造影パターンから悪性を疑い良悪鑑別にも有用であった。

【症例2】50歳代女性。検診MMGにて右乳房にFADを指摘され、他院の針生検で浸潤性乳管癌と診断されている。USで右乳房10時方向に円形で境界粗造、前方境界線の断裂を疑う低エコー腫瘤があり、他院指摘の浸潤性乳管癌と思われた。広がり診断目的のMRIで、主腫瘍から4cm程乳頭側に娘結節を疑う濃染域を認めたため、second look US と CEUS を施行した。second look US では右乳房1時方向に分

葉形で境界明瞭平滑な5mmの低エコー腫瘤を認め、カラードプラでは内部に血流シグナルの検出無し。造影を行うと腫瘤はBモードより広い範囲がやや不均一に強く染影され娘結節が疑われた。この病変に対しUS下MMTを施行し、病理結果はいわゆる乳腺症であった。乳房部分切除術を行い、最終病理診断にて切除断端は陰性であった。

MRIで娘結節を疑った病変はカラードプラで血流を捉えられなかったがCEUSでは強く染影され病変の同定に繋がった。さらにインターベンションを行うことで良性と診断し乳房部分切除術が可能となった。

【まとめ】CEUSは、カラードプラで指摘し得ない微弱な血流を捉えることができ、MRIで指摘された乳腺異常に対しsecond look USで見つけた部位が同一のものであることの確認、良悪性の鑑別、および、インターベンションを行うかの判断に有用であり、術式決定にも寄与できた。

大垣市民病院 形態診断室-(0584)81-3341